



## TO-DOリスト, WISHリスト, CAN-DOリスト

根岸 雅史 Negishi Masashi  
(東京外国語大学)

### 1. CAN-DO リストは TO-DO リストではない

今日、各学校で作成された CAN-DO リストをいろいろと目にするようになった。しかし、これらの中には、「これは本来想定していた CAN-DO リストなのだろうか」と、首をかしげたくなるものも少なくない。

その代表的なものは、観点別学習状況の評価における単元の評価規準を「CAN-DO リスト」の形で示し、これらを各学年や卒業時における学習到達目標としているというものである。この「CAN-DO リスト」では、各単元に技能ごとの CAN-DO ディスクリプタが挙げられているので、年間では山のようなディスクリプタが提示されることになる。

しかしながら、この件に関しては、『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』(文部科学省初等中等教育局, 2013) (以下、『手引き』)に、次のような記述がある。

観点別学習状況の評価における単元の評価規準がそのまま「CAN-DO リスト」の形で設定する学習到達目標となることは考えにくく、年間を通じて、複数の単元における学習を通して、ある学習到達目標を達成することになります。(p.37)

したがって、観点別学習状況の評価における単元の評価規準を CAN-DO にしただけのリストは、「TO-DO リスト」ともいうべきもので、文科省が求める CAN-DO リストではないということがわかる。

つまり、『手引き』は、特定の単元に基づいて、CAN-DO ディスクリプタを作るのではないと言っているのだ。

現行版の *NEW CROWN* で考えてみよう。観点別学習状況の評価であれば、2年の LESSON 5 “My Dream” の「外国語表現の能力」としては、「自分の夢について、スピーチすることができる。」(①: TO-DO 型 CAN-DO) とでもなるだろう。しかし、自分の夢についてスピーチするのであれば、どういふきっかけでその夢を持つようになったのかを説明したり、将来どうしたいかを語ったりすることも含められる。「きっかけを説明する」ことは、LESSON 1 USE Write の「春休みの思い出」や LESSON 2 Mini-project の「自分史エッセイ」での活動を通して、「将来について語る」ことは、LESSON 3 GET Part 3 Practice の活動を通して、身につけられると考える。そう考えれば、『手引き』の言う「複数の単元における学習を通して」達成される学習到達目標は、「自分の夢について、その夢を持つに至ったきっかけや、将来どうしたいかなどに触れながらスピーチすることができる。」(②) といったものになるだろう。

### 2. CAN-DO リストは WISH リストではない

しかしながら、単にいくつかの「単元の評価規準」を集めて書けば、学習到達目標になるというわけでもない。次の CAN-DO ディスクリプタを見てほしい。これは、どの段階の学習到達目標と考えるだろうか。

I can connect phrases in a simple way in order to describe experiences and events, my dreams, hopes and ambitions. I can briefly give reasons and explanations for opinions and plans.

実は、これは CEFR, Spoken Production の B1 のディスクリプタである (Council of Europe, 2001: 26)。CEFR は、ご存じの通り、下から A1, A2, B1, B2, C1, C2 となっている。

このディスクリプタの「自分の夢を語る」という部分は、①の TO-DO 型の CAN-DO と重なっており、中学の「話すこと」のディスクリプタとしても、この類のものが挙げられていることはよくある。しかし、先日発表になった「英語教育改善のための英語力調査」では、高校 3 年生の「話すこと」についての到達度は、ほとんどが A1 以下であるということが明らかになった。だとすると、中学の到達目標としては、前掲のような B1 ディスクリプタは、現時点では相当な高望みであるということになる。

以前に行われた特定の課題に関する調査 (英語: 「話すこと」) (中学校) の結果を思い出してほしい。好きな季節を 1 つ選んで、それを選んだ理由やその季節にどのようなことをしたいかなどについてクラスの友達に話す (準備時間 30 秒, 解答時間 1 分) という問題があった。この問題は、正答 5.6%, 準正答 26.6% で、これらを合わせた通過率は 32.2% だ。準正答は、好きな季節・その理由・その季節にやりたいことというすべての要素が入っているが、「各事項について単一の文を話しているだけ」となっているものである。各事項を膨らませて話していれば、正答となる。準正答の解答例としては、“I like summer because I like summer vacation. I want to swim in the sea.” が挙げられている。

1 分間にこの程度以上話せる日本の中学 3 年生は、3 割程度ということだ。こうした現状を考えれば、上の②の到達目標は、日本の中学生にとって当面は相当に高いハードルと言える。これは、むしろ「WISH リスト」に入るようなものと言った方がいいだろう。

### 3. CAN-DO リストはどう作るか

では、どうしてこのようなことが起こるのであるのか。教師は生徒に教えたことはできるようになってほしいと思い、そのために指導を行う。したがって、学習到達目標は「指導したことができるようになること」となる。「自分の夢について、その夢を持

つに至ったきっかけや将来どうしたいかなどに触れながら、スピーチすること」も授業でやっているのだから、できるようになっているはずのディスクリプタとなる。

教えていないことはできるようにならないが、実際には、教えたことでもなかなかできるようにはならない。また、教室でできるようになったからといっても、それには入念な準備をしたり、先生や友達の助けがあったりしてできているのだ。学習は複雑である。できるようになるにはかなり時間がかかるものがたくさんある。教えたときはできるけれども、すぐにできなくなってしまうもの、使おうと思えば使えるけれども、面倒なのでなかなか使わないもの、それ単独に集中できるときには使えるけれども、他のことと一緒にになると使えなくなってしまうもの、等々…。

こうしたことを諸々踏まえた上で、卒業時に本当に生徒が自力で何がどのくらいできるようになっているのか、考えてほしい。たとえば、先ほどの CAN-DO ディスクリプタ②のレベルでは WISH リストに入ってしまうようなものでも、パフォーマンスの条件を緩めたり、言語の質のレベルを下げたりして、ディスクリプタの難易度を下げることができる。つまり、「あらかじめ準備をした上で、メモを見ながらであれば、自分の夢について、その夢を持つに至ったきっかけや将来どうしたいかなどに触れながら、短いスピーチをすることができる。」(③) とすれば、多くの中学生でも達成可能な目標となるだろう。

CAN-DO リストを使って学習到達目標を設定する場合は、③のようなディスクリプタを作った上で、そこに到達するためには、指導と学習において、どのような言語活動と学習活動をどのくらい繰り返す、定着させる必要があるかを考えなければならない。さもないと、英語学力調査の結果は、いつまでも「驚くような結果」のみである。

#### 【参考文献】

Council of Europe. (2001). Common European Framework of Reference for languages: Learning, teaching, assessment. Cambridge: Cambridge University Press.

文部科学省初等中等教育局 (2013). 「各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き」